

大陸（北支）

生き抜いた

河南・老河口作戦

兵庫県 宮崎 政芳

私は兵庫県の相生で生まれ相生市育ち、大正十一年三月二十四日に生まれましたが、父は播磨造船所に勤めていました、私が十五歳のときに死亡しましたので、私も昭和十一年播磨造船所に就職しました。

当時の世相からいって軍隊の現役志願をして合格したが、一人息子の長男だったためか、籤逃れとなり役所へ文句を言いに行きました。昭和十七年徴集の兵隊検査では合格となり念願がかないません。若気の至り

と申すか、当時の会社全体の雰囲気というか、手柄を立てて戦死するつもりなので、会社を退職し、その退職金で遊ぶだけ遊んで死のうと思いました。しかし、上司から止められました。下士官志願をしたら、職業軍人になるのだから退職させると言われました。そのため、戦後復員後、会社へ帰り定年まで勤めることができ、現在も生活していただけるわけです。

十七年徴集兵としては一番早い、昭和十七年十二月一日、鳥取の部隊へ入営。十日ほど隊にいて十二月十二日下関出港、十三日朝鮮釜山上陸、十六日鮮満国境通過、十八日、北支河北省保定の歩兵第一六三連隊着入隊一泊し、第一大隊所在地河間で第一機関銃中隊に配属されました（入隊者三十名）。

河間の兵舎で現地初年兵教育三カ月（教官門脇少尉）、

三月二十日第一期検閲。北支は寒く、馬の手入れで凍傷になる者も多く、半数の者は入室、入院をしました。私は馬が好きでしたので余り気にもせず凍傷にも瘰癧（ひょうそう）にもならなかった。その後、教官は理解があり、初年兵は湯を使うようにと改めてくれたので我々初年兵は随分助かり、入室、入院者も減りました。

初年兵教育中でも敵襲もあり、中隊は高陽県地域内の肅正討伐や治安警備についていました。六月、我が大隊は河間から出動、第一機関銃隊は高陽から進発し蠢動する敵を攻撃しました。城門より突入した中隊長は、屋上から敵が投げた手榴弾で重傷を負ったのですが、この敵を撃退したという戦闘もありました。

七月に、中隊は武強県に移駐、前任の春部隊（独立混成第九旅団）独立歩兵第三十六大隊から武強地域の警備を継承しました。武強は状況が悪いので、分駐隊を配備し、肅正討伐、治安警備をしていました。その間の戦闘で何人かの兵が戦死をしたり、少数で治安警備行動中、敵便衣隊から奇襲攻撃を受け壮烈な戦死を

された人もいました。

後に話す「オ号作戦」で本隊が出動中、留守隊の小銃では朝の点呼時に敵襲があり（八路軍は我が軍の小兵力の所を突いてくる）、一個分隊が全滅し、二人は西安まで連行されたが帰隊し、軍法会議にかけられたという気の毒な事件もあり、治安の悪い地域でした。その時の中隊長は負傷入院中でしたが進級は遅れ、中隊長代理は他へ転属させられました。この戦闘は十月十七日、早朝で一個分隊が約千名という敵から包囲攻撃を受けたもので、奥田分隊長は百倍の敵と戦って玉砕したのですが、二人が一時捕虜になったということ、責任問題が出たわけでしょう。

私たちが初年兵が初めて体験した作戦は「十八秋冀西作戦（オ号作戦）」で、期間は九月十六日から十二月二十日までの間でした。この作戦には坂本小隊が編成され、小隊は九月十日ころ、武強の中隊本部を出発、武邑、衡水で第二大隊の指揮下に入りました。

九月十四日ころ、輸送列車で出発、石太線（石家荘―太原間）の獲鹿という駅で下車して作戦に入り、平

山県の奥地に向かつて前進を開始しました。作戦は平山、霊寿、阜平、曲陽各県で実施され、大行山脈の険しい山や谷を突破しての戦いで、各所で有力な共産八路军などと戦い、大きい戦果を挙げた。

我々初年兵は細かい正確な地名などはよく分からずの作戦で、討伐や治安警備とは違ったものであります。その作戦中の思い出をお話します。

我々の小隊には住民（現地）の人が参加し、いろいろ協力というか共存してくれていました。雑務や労役などをしていた二人、「大政・小政」と名を付けていました。彼らは情報をくれたり、地形も知っている。我々兵隊と一緒に生活していました。

あるとき、大政に止められたのを聞かずに、ある部落へ行つたところ、敵に撃たれましたが、助かつたこともありました。やはり、彼らは現地の情報もとれていたらうし、交流もあつたかもしれない。また日本軍が攻められると、自分の身も危ないでしょう。作戦終了後、二人には驢馬や物資などを与えて謝礼としたので、喜んで帰って行きました。利害と人情が互いに

通じあつたためでしょう。

また、山を下りる前の思い出は、敵前、渡河のとき、川の水が凍つて、動かないと体に凍り付く。上陸したら、バリバリ氷が剥がれる音がする。黎明時の渡河で、上がつて夜が明けたら騎兵になつて行つた学友とバツタリ会つて奇遇であつたが、共に元気でいることを喜び合いました。

悲惨な思い出もあります。二人の兵隊が乗馬で地雷に遭い、足を負傷しました。敵は日本軍が通る所に地雷を仕掛けますが、地面を見ただけで分からない。馬は「江田」という弾薬を運ぶ馬でした。地雷の爆発で腹が裂け、中から腸や臓物が飛び出した。馬が苦しがるので、兵隊は中へ押し込むが、とうとう馬は助かることなく死にました。

十二月中旬、作戦は終了し帰隊しましたが、また、十二月二十一日、山東省の討伐に出発しまして、第二軍の指揮下に入り、列車警備などをして棗莊はありました。昭和十九年一、二月、山東省の費県に駐屯して肅正討伐、治安警備をしていましたが、これは同地

域担当の第三十二師団（楓）が南方へ転出したため新設の独立歩兵第一旅団（幹兵団）の編成完結までの暫定的なものでした。その間にも度々の戦闘で戦死者も出ています。

北支軍の対戦相手は、共産軍（八路軍）が多く、こちらが強いと見ると逃げる。弱いか兵力が少ないと攻めて来る。地域住民を手馴づけたり、脅迫したりして情報を取ったりしていました。我が軍の隊が地雷にかかると、撃ってくる。どこかで監視しているのです。正規の服装の者も、便衣で住民に混じっている者もいる。日本軍にとってはどこを向いても敵であることが多かったです。昭和十九年三月、河南作戦準備、参加のため、列車輸送で石門、新郷を経て黄河の北岸に至った。

しかし鉄橋は破壊されていたので上陸用舟艇で渡河しましたが対岸から撃たれました。上陸して陣地に入ったのですが戦闘となりました。

あるとき、射手が戦死しましたが、その額で重機の押鉄を押ししていました。弾薬装填手は、射手が連続し

て撃っていると思ひ弾を装填する。おかしいと思った射手は既に戦死していたということがありました。

また、陣地を構えていると直前に敵陣地がある。両方ともに余り近いので撃たない。そのうち晩になると敵が話かけてくる。日本軍に三人入り、一緒に作戦に行ったこともあります。日本軍の方がよいと道案内をしてくれたこともあったという。皮膚の色も顔も似ている、漢字を書く、同色同文、しかも戦争も支那事変の時から延々と続いている。相手も相当に戦争が嫌にもなっていたろうし、兵隊は犠牲になりたくなかったのでしょう。

霸王地陣地に進出した中隊は、張伸陣地に位置して連日の訓練です。駄馬が使えないことも想定してか、林師団長巡視の際の指示があつたそうで、機関銃を背負って崖を登る訓練に重点がおかれました。

四月十九日、霸王城から攻撃が開始されました。二十日、我々の第一大隊は師団の予備隊となり友軍の第一線部隊の激戦の後を続行しました。そこで我が大隊は稲垣（大隊長名）挺進隊となった。大隊長は勇敢な

人でした。

挺進隊の任務は、師団主力の登封攻略に際して登封北方の山地を迂回して、速やかに石橋（登封北方十キロ）付近の隘路あいつろを占領、敵の洛陽への退路を遮断することであったと聞きました。作戦前の訓練の重点にありましたように、中隊は駄馬を使用しないため、機関銃を臂力搬送しました。兵員は小銃編成にして参加し中隊長は「白虎隊」と名付けていました。

大隊は道なき道、敵の間隙を縫って挺進しました。夜間一緒に歩いてきた部隊が、夜が明けて相互に敵であることに気付いて、びつくりして戦闘を開始したこともあります。五月四日の夜明け前進中の大隊の前方三〇メートルを部隊が行進している。一方は山、一方は谷、数メートルに近付くと重慶軍であると判明したこともあります。直ぐに先頭部隊は格闘を始めました。そのとき、重慶軍の捕虜が自分で岩に頭をぶつけて自決しました。私はその様子を見て、大した男もいるものだと、いまだに頭に残っています。

直接敵とぶつかれば殺すか殺されるかの戦いになり

ます。しかし、戦いが中止されてからは最近言われている「南京虐殺」など、私たち実戦に参加した者は、戦い終われば敵味方ない人間同志、お互いに人間として認め合った者にとっては理解ができません。

稲垣挺進隊は独立行動だったから、昼夜連続、挺進し「重傷者は自らを処置、戦死者は爪を取るのみ、歩きながら眠る、敵に遭遇したらば、弱いところを見付けて強行突破、射撃せず白兵で戦闘する……」と命ぜられていました。とにかく敵の第一線を突破して敵と同居するまでが大変でした。

洛陽攻略は五月二十四日ころで、作業隊が壕内に入ったが突然側防の機関銃から射撃され、ほとんどが戦死しました。死んでいる者、まだ動いている者もありましたが、後から突入した我々も撃たれるので、助けることもできませんでした。我々はパルプの梱包をころがし、それを盾にして戦ったので助かりました。

洛陽の城壁は壕が五〜六メートル掘ってあり、その先に二メートルくらいの壁があります。中隊は作業隊の竹梯子を利用して登って、縄梯子を城壁から降ろし、

機関銃を分解して背負い、第三小隊長の坂本曹長を先頭にして次々に城壁を登り、城内に飛び下り、戦列を敷いて猛射を浴びせました。このとき、坂本小隊長は城壁の上で頭部貫通銃創を受け壮烈な戦死を遂げられました。

激戦は続いて、部隊は夕刻から市街地（城門はたしか五カ所ではないかと記憶）へ突入し、翌日朝、城内を完全に占領しました。この戦闘には新聞記者が我々の後方まで来ていました。占領後一日大休止がありました。坂本小隊長の戦死状況、城内突入の状況を再現させてくれというので、写真撮影をしました。洛陽城内地下壕には敵兵捕虜が二千名くらいいたといいます。

中隊は大変御苦労ということで城内警備をしました。昭和二十年一月～二月、一ノ瀬中隊長以下中隊主力は留守隊を洛陽城内に残置して、前年に引き続き黄河鉄橋警備、対空射撃隊の任務を続行しましたが、北岸の橋舎で生活をしていました。在支米空軍機は連日のごとく飛来して銃爆撃してくるので、対空射撃は日増し

に激しくなってきました。

京漢作戦、湘桂作戦により在支米軍主力は西北方面に転移し、昭和二十年になると、華北の老河口、華中の芷江の両飛行場を前線基地として、華北の鉄道や自動車道を連続攻撃するようになりました。そのため老河口作戦を開始しました。

中隊の主力は老河口作戦参加のため黄河鉄橋警備を交代して洛陽に帰還出動の準備をしました。これは私にとつての最後の作戦で、我々の歩兵第一六三連隊も苦しみまして、同年兵の下士官も戦死しました。稲垣大隊は河南、京漢作戦と同様に挺進隊となり、我が第一機関銃の主力も参加しました。

私は作戦の最中、顔がむくんで腎臓病と診断され、三人の戦友と負傷兵と共に軍医から後送を命じられました。戦友が戦死しているので私は残りたいし、主力は老河口で戦っているので、心苦しかったです。途中、二人の後送者は死亡し、鄭州の野戦病院から洛陽城内の留守隊に帰隊しました。

留守隊長は武藤准尉でしたが老河口へ戻って行かれ

ました。本隊は中国軍の総反攻を受けて炎天下激戦、苦戦の日が続いて戦死者、戦傷者が続出し兵力は減少していました。終戦は洛陽で聞きました。我々が軍からの情報の前、住民の様子がおかしい。「指を差して日本軍負けた」と言った。その後、山の方で敵が構えているのが見え、我々は小敵ながら城門の警備をしていました。城門がたしか五カ所あり留守隊ばかりだったので警備には骨が折れました。

二三日後に軍使が来たので、北門近くの師団司令部へ行けと言った。その結果、師団司令部から命令が出て城内を蒋介石軍に引き渡しました。命令であるので中国軍との争いもなく数日後、城外の兵舎へ出しました。学校の跡もありました。復員命令が出るまでそこにいました。復員というので、反水という所まで行軍で行ったところが、中止ということで引き返したこともあります。

その後また、反水まで列車で、洛陽までは行かなかったのです。その後は修復したので、浦口―渡河―南京―蘇州―上海へと行きましたが、本隊は四―五日た

って後から来ました。上海で第一六三連隊河野又四郎大佐（前連隊長上坂大佐は少将に進級、五月三十日、第五十九師団（衣）の歩兵第五十三旅団長に栄転）以下、市政府で検査を受け、市政府近くで数日滞在しました。

昭和二十一年三月三十一日上海（呉淞）港出帆、復員船は日本の商船で船倉は二段、四月二日博多岸壁で停泊、翌日上陸。兵庫の者は数名で、そのうち広島の人ば広島が焼野原となつていたので、東京へと行きませんでした。

私は復員を会社に知らせずと、会社から直ぐ来いという。会社はあまり仕事はなかったのだと言います。しかし復員者は全部引き受けてくれました。母が家を守っていて下宿屋をしていて、何とか食糧はあったのです。親戚で漁師をしている者がいて、会社員は五百円封鎖の生活だから、漁師になれ、と船を買おうと思つた。しかし、その船の焼玉エンジンにひびが入っているのもっと良い物をと捜しているうちに会社へ復帰、その後ずると、ずっと会社勤めをし、定年

まで勤務をしました。

もし入営するときに退職していたら、新規採用となつて勤続年数も随分損をしていたと思います。思い出せば、河南作戦も随分辛かった、作戦らしい作戦でした。老河口作戦も大変で、特に後期の撤退も大変でしたが、私は腎臓病で後送され助かったのです。復員後も幸いでしたし、現在も健康、運の分かれ目は生死の分かれ目です。

昭和十三年我が連隊の編成以来の戦没者は一、四一人ということですが、終戦後戦傷者四一九人が未帰隊者であり、そのうち多数の戦没者があつたと推測されます。また、上海終結時の部隊兵員は二、六二八人で、その中の一人として私がいるのです。更に復員後四十九年、多くの物故者がいることを思うにつけ、私は幸せであります。

「興亜植樹」部隊

千葉県 古川 文吉

―機動歩兵連隊という変わった部隊です―

はい。私は昭和十六年徴集で第一乙でしたが、現役入隊です。騎兵十四連隊要員として昭和十七年一月大阪難波別院という寺に集合して、兵器一式をもらつて広島宇品で乗船。着いた所が蒙古の砂漠の真ん中で包頭という街でした。

農家の長男として生まれ、両親と妹三人の六人家族です。農学校を出て、青年学校に行き、軍事教練を受け、昭和十六年には宮城（現皇居）前広場で青年訓練十五周年記念行事に代表に選ばれ、天皇陛下の御親閲を受けたことがあります。

家は米作中心の農家ですが、役牛がおりましたので、動物の扱いには馴れており、馬の世話も苦になりませんでした。両親も元気で、長男を兵隊に出すのは心配